第　１１　号

定価一年間３００円
組合員の購読料は
組合費に含む

ひやま

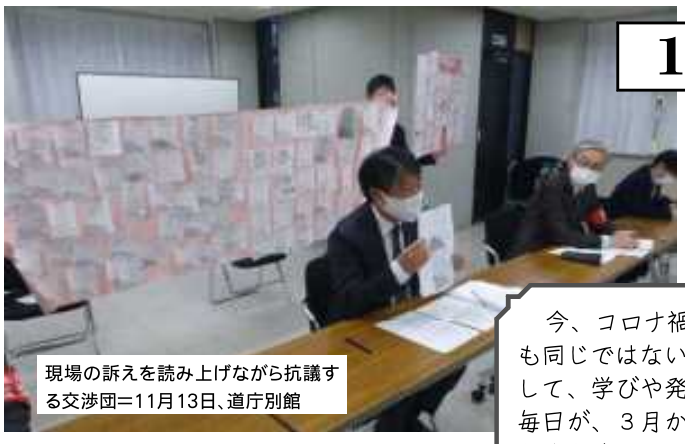
発行　檜山教職員組合

〒 043-0056　江差町字陣屋町 86-1
TEL　0139(52)0858　FAX(52)1490
発行責任者　白　山　　尚
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

1年単位の変形労働時間制

条例提案強行

道教委



現場の訴えを読み上げながら抗議する交渉団＝11月13日、道庁別館

コロナ禍の今、やることですか！

道教委は、「1年単位の変形労働時間制」の導入を可能とする条例案を道議会に提案する決定をしました。交渉で、制度の深刻な矛盾がいっそう浮き彫りになるなか、「少なくとも先送りするべき」という組合の要求を拒否しての強行でした。交渉団は、現場の訴えを紹介しながら強く抗議しました。

今、コロナ禍で様々な対応が迫られています。それは行政でも同じではないでしょうか？子どもの安全と私たちの安全、そして、学びや発達の保障を日々、知恵を絞って考え、実践する毎日が、３月からず～っと続いています。今！？変形労働時間制を制定する必要と余裕がありますか？私たちの日々のどこを？何を？見て、この考えに至るのか、正直全く分かりません。超勤を解消するならば、子どもの安全・安心、学力向上を考えるならば是非ともこの労力を少人数学級実現に注いでいただきたい。手を取り合って、子どものために進んでほしいです。

―― 現場から寄せられた訴えのひとつ

当事者無視

条例提案について道教委は「この度行った意向調査結果を踏まえた」と説明します。

文科省は、条例制定を求めるにあたり、「まず、各学校で検討の上、市町村教育委員会と相談し、市町村教育委員会の意向を踏まえた都道府県教育委員会において・・・整備する」としています。しかし、「意向調査」は、各学校での検討状況を踏まえたものとならず、現場教員の意見が反映されたとは言いがたいものでした。道高教組・道教組が実施した緊急アンケートでは、「1年単位の変形労働時間制」について96％が制度導入について意見などは聞かれていないと回答しています。

曲がりなりにも「働き方改革の選択肢の一つ」とうたうのであれば、当事者である教職員にていねいな説明を行い、その上で検討されるよう十分な時間をかけるべきです。

他府県で条例提案を表明しているところはなく、道教委の態度は突出しています。1日8時間労働という大原則を壊す制度導入の手続きを、現場の声を無視して性急にすすめることは断じて許されません。

抜本解決に集中を

制度の導入には、時間外在校等時間の上限（週45時間）厳守など厳しい前提条件が付されています。多くの教職員が上限時間を超えて働いている実態にあることは、道教委調査からも明らかです。現状では導入できない制度です。

業務の削減や負担の軽減、教職員定数の改善など、やりかけている課題に集中すべきです。感染症が再び増加傾向にある今、現場では必死の対応がはかられています。長時間労働による負担に加え、過酷な状況がいつまで続くのかという展望を描けないことによる精神的な負担も深刻です。交渉で道教委は「アクション・プランを着実に進め・・・日々の教員の業務や勤務時間の縮減に努める」と回答しましたが、そうした程度で解決できる状況ではありません。抜本的な改善に向けた取組に力を注ぐべきで、少なくとも感染症が収束するまでは条例整備を急ぐべきではありません。

乱用の歯止めなし

「制度導入によって長時間労働が固定化し、助長することになるのでは」と不安視する声が広がっています。国会審議では「勤務時間の増加にならないよう歯止めを作る」としていましたが、示された指針等は「留意」「配慮」「できる限り」「汲み取る」といった曖昧な表現で、歯止めとはなりがたいものです。指針等の運用について、制度の設計者と運用者と運用監視者が同じであることも問題です。

まとめ取りできる休日は「5日間程度が限度」と説明されていましたが、交渉では、日数の上限が法令等で定められていないことも判明しました。

同制度は、民間では労使協定の締結が必須ですが、教職員に適用できるよう「条例により定める」と法改定したものです。その仕組自体は大変な問題ですが、労使協定で確認すべき内容を条例で定めるとするのであれば、少なくとも、歯止めとしての措置も、条例提案とともに明らかにすべきで、それを示せないならば提案を持ち出すべきではありません。

現場の声を

道教委は「働き方改革を進める選択肢」「教職の魅力向上につながる」と言いますが、現場軽視のやり方や交渉経過で見て取れるように、実態が改善されるとは到底思えないものです。

規則の整備や服務監督教育委員会としての導入の判断はこれからです。現場の実態を明らかにし、抜本改善を求める声を広げていくこと訴えます。

教育条件改善

願いが形に

教育条件の改善を求める声が広がっています。世論に押されて国も動き出しました。

文科省は来年度の概算要求に少人数学級を掲げました。義務標準法の改正も視野に入れています。萩生田文科大臣は「不退転の決意で臨む」と言明しました。

また、特別支援学校だけになかった設置基準について、中教審の「中間まとめ」に初めて盛り込まれました。国が、障害が多様で一律の基準はなじまないとしてきた結果、教室不足など深刻な過大・過密状態が放置されてきました。保護者、教職員はじめ多くの声の高まりを受け、基準設置に一歩を踏み出すこととなったのです。運動を担ってきた保護者は、「あきらめなかったことが未来になる」と語りました。

とりくみ中の教育全国署名へのご協力をお願いします。

少人数学級

支援学校設置基準

教育署名にご協力を

2020檜山合研地域別集会　実践報告より

続　６年生と学ぶ「総合的な学習」「国語」「ミニ発表会」

前号に続き山根里美さん(上ノ国小)の報告を掲載します。総合学習から国語科学習へとすすみ、創作表現活動に挑みます。横断的学習が前々号で紹介したS・Aさんの実践に重なります。子ども主体の実践視点も。この後、発表会へと続きますが、その前段までを紹介します。

物語を作ろう

感染症の歴史調べから劇へ

国語の「展開を考えて、表現を工夫して書こう」という単元で「物語を作ろう」という題材が取り扱われる。前単元は「随筆を書こう」だった。そこでの学習を振り返り、学習への意欲と見通しが持てるよう構想をしっかり練る必要があった。次のような学習計画を立てた。

学習のゴール
劇の原作になるような物語を作ろう。

①「上ノ国の感染症の歴史調べ」からわかったことをもとに、登場人物を決めよう。
- 主人公の人物像を設定しよう。
- その他の登場人物像を設定しよう。

②物語のあらすじを組み立てよう。
- 山場のある展開を考えよう。

③物語を作り、読み返そう。
- 書き出しを工夫してみよう。
- 様子を効果的に表す表現を使ってみよう。

④完成した物語を友達と読み合い、感想を伝え合おう。
- 筋道の通った文章になっているかな？
- 表現を工夫しているかな？

●シナリオされるかな？

おおまかな流れを確認したあと、登場人物のキャラクターを設定した。主人公は「元気で天真爛漫な子」という人物像で描くことになった。６年生のカラーを反映している。

あらすじは班で考えさせ、文章化する上での個々の子どもの実態や課題に配慮した。あらすじを相談し合うなかで、その子なりの想像力を働かせることも可能になる。事実、「元気で天真爛漫な子」が伝わるエピソードについて話し合っていたとき、一人ひとり固有のイメージが語られていた。子どもたちの自由な発想力は素晴らしく、私も大いに刺激された。

あらすじを元に個人で物語を書く作業に入った。そこで「時代考証」が必要なことに気づく子どもたちが現れた。たとえば、名前や学校だ。今風の名前では伝わらないと考えたのだ。学校も今とは制度が違う。他にスマホ時代と重ねたのか、電話についても考証が加えられることになった。天真爛漫な主人公が玄関チャイムにいたずらをするという話も出たが、当時は玄関チャイムなどなかったのではと、議論になった。

完成度は決して高くはないけれど、途中での気づきをバネに想像力を膨らませていく子どもたちの取り組みは充実していて、夢中になって書く子が多かった。

上ノ国小学校　山根里美さん

子どもたちが真剣に学ぶ姿を見ながら、学びの成果を何とか形にしたいと考えた。恒例の行事活動が大きな制約を受けるなか、６年生として活躍できる場を確保してやりたかった。幸い、10月に「ミニ発表会」が組み込まれている。そこを一つのターミナルとして創作劇に挑戦し、披露させたいと考えた。

子どもらの原作をもとにシナリオづくり

５年生の国語でディベートの学習をしたときに、「６年生の学習発表会でやる劇は『笑い系（喜劇）』か『感動系』か」というテーマで、意見を交流したことがあった。どちらも、どうしてそう考えるのか理由をしっかり考えていて、うなずける内容だった。ディベートが終わってから改めて子どもたちに聞くと、「笑いあり、涙ありの劇をやるのが理想」ということだった。この時から、子どもたちの願いを叶えることができればいいなと思っていた。

シナリオ化するというバトンがいよいよ私に回ってきた。ある程度の登場人物やあらすじは決まっていたが、20人が演じる劇のシナリオにする自信がなかったので、同僚の先輩先生を頼った。２年前の６年生と「川とノリオ」の劇に挑戦した松尾奈緒美先生だ。教科書をもとに自力でシナリオ化した松尾先生。時間を割いて相談に乗ってくれた。

子どもたちの考えたあらすじを伝え、「笑いあり、涙ありの劇」になるように、登場人物やセリフを一緒に考えていった。実際に演じながら思い付いたセリフを出し合う。あまりの熱演ぶりに二人で何度も大笑いした。私一人であれば、きっと行き詰まっただろうけど、他の人の力を借りることで、楽しく考えられた。これで、だいたいのストーリーが決まった。

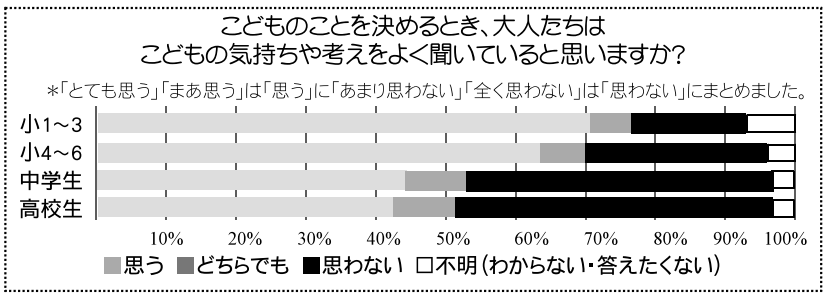
松尾先生と考えたストーリーをもとに、何日かかけてシナリオを作っていった。子どもたちに「先生、シナリオはできましたか？」と急かされながらで、締め切りに追われる作家気分だった。

修学旅行から帰ってきた土日で、やっとこさ完成した。子どもたちに紹介すると、演じる友達の姿がイメージできたようで、「早くやってみたい」と受け入れてくれた。

（続く。次号で完結）

慰霊碑を調べる子どもたち

コロナ×こどもアンケート中間報告　国立成育医療研究センター



同センターの「コロナ×こども本部」が第３回中間報告を10月８日に公表しました。教育機関向け資料も配付されました。そこに掲載されたこどもの声の一部を紹介します。

- コロナが今どういう状況かくわしく教えてほしい。
- 休校や登校、休校期間の勉強について発言する場所がない。
- 大人が思っている以上に、部活と学校行事はこどもにとってとても大事な物です。大人もこどもだったはずなので忘れないでほしいです。
- 学校のコロナ対策に参加したい。決められたことしかしないのはおかしい。
- 大人だけで色々議論しないでこどもの気持ちも聞いてください。